

お米のいまをチェック

令和7年6月号



- 令和6/7年の需給見通しについては、需要量を674万トンと設定。この結果、令和7年6月末民間在庫量は158万トンと見通されます。
- 令和7/8年の需給見通しについては、需要量を663万トンと設定。令和7年産主食用米等の生産量の見通しは、令和6年10月の基本指針で設定した683万トンとします。この結果、令和8年6月末民間在庫量は178万トンと見通されます。

令和6/7年及び令和7/8年の主食用米等の需給見通し

(単位：万トン)

令和6/7年	令和6年6月末民間在庫量	A	153
	令和6年産主食用米等生産量	B	679
	令和6/7年主食用米等供給量計	$C = A + B$	832
	令和6/7年主食用米等需要量	D	674
	令和7年6月末民間在庫量	$E = C - D$	158

令和7/8年	令和7年6月末民間在庫量	E	158
	令和7年産主食用米等生産量	F	683
	令和7/8年主食用米等供給量計	$G = E + F$	841
	令和7/8年主食用米等需要量	H	663
	令和8年6月末民間在庫量	$I = G - H$	178

注1：上記の見通しは、国内で生産された主食用米等の需給見通しであり、SBS方式による輸入米は含まれない。

注2：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。



6月末民間在庫量について

Q.6月末民間在庫量が需給状況を判断する指標の一つになっていると言われるのはなぜですか？

A.米の年間供給量は、前年産以前に収穫された米の6月末民間在庫量（持越在庫量）と当該年の生産量の合計であるため、6月末民間在庫量の増減は当然、その年々の需給状況の指標の1つとなります。例えば、民間在庫量が増加すれば需給は緩和傾向にあるといえ、一方で、減少すれば引き締まりの傾向にあるといえます。また、価格は需給動向等により変動しており、過去の状況をみても、6月末民間在庫量の増減と相対取引価格の変動には一定の相関がみられます。

Q.「6月末」を基準としているのはなぜですか？

A.前年産以前に収穫された米の民間在庫量の増減をより正確に把握するためには、当該年に収穫される新米が出回る前を時点とする必要がありますが、宮崎県などの早場米は毎年7月頃から新米が出回ることから、6月末を基準としています。

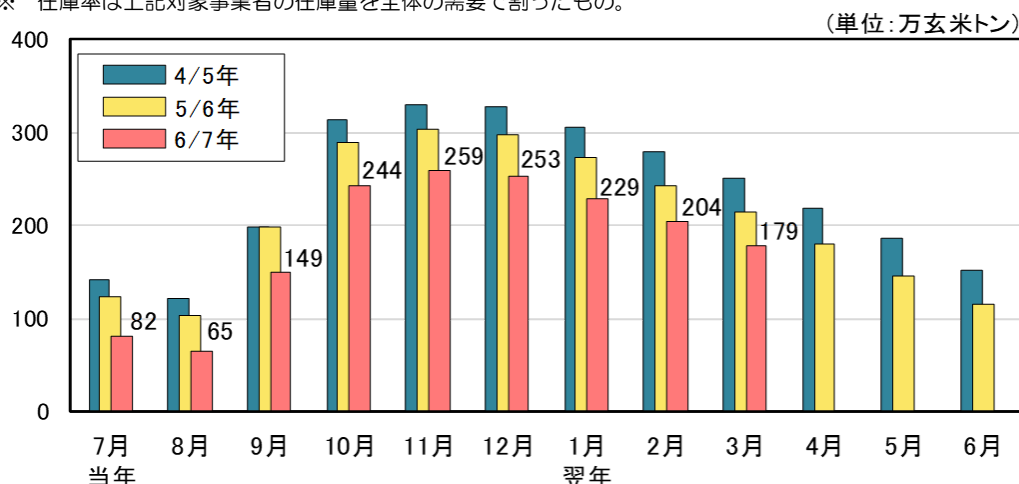
- 令和7年4月末の出荷及び販売段階における民間在庫は、対前年同月差▲12万トンの168万トンとなっている。また、流通段階別でみると出荷段階で対前年同月差▲14万トンの126万トン、販売段階で+2万トンの43万トンとなっている。

【令和7年4月末民間在庫量のポイント】

- 毎月公表している民間在庫量は、①500トン以上の集荷業者、②4,000トン以上の卸売業者が対象。およそ民間の流通在庫全体の75%をカバー(下記参考参照)。
- 令和7年4月末の民間在庫量は、前月に引き続き、3月末の対前年差▲35万トンから▲12万トンと減少幅は縮小したものの、4月末在庫としては近年では最も低い水準の168万トン(うち売り渡した政府備蓄米の数量は16.4万トン)。
- これについては、令和6年産の生産量(12月10日公表)が679万トンと前年産より18万トン多い中で、出荷段階で対前年差▲14万トン、販売段階で同+2万トンとなっていることを踏まえれば、報告対象となっている集荷業者の集荷が前年に比べ減少していることが主な要因と考えられる。

※ 在庫率は上記対象事業者の在庫量を全体の需要で割ったもの。

月別推移



資料：農林水産省「米穀の取引に関する報告」

注：1 水稲うるちのみ及び水稲うるち玄米(醸造用玄米を含む。)の月末在庫量(玄米換算)の値である。

2 出荷段階は、全農、道県経済連、県単一農協、道県出荷団体(年間の玄米仕入数量が5,000トン以上)、出荷業者(年間の玄米仕入量が500トン以上)である。

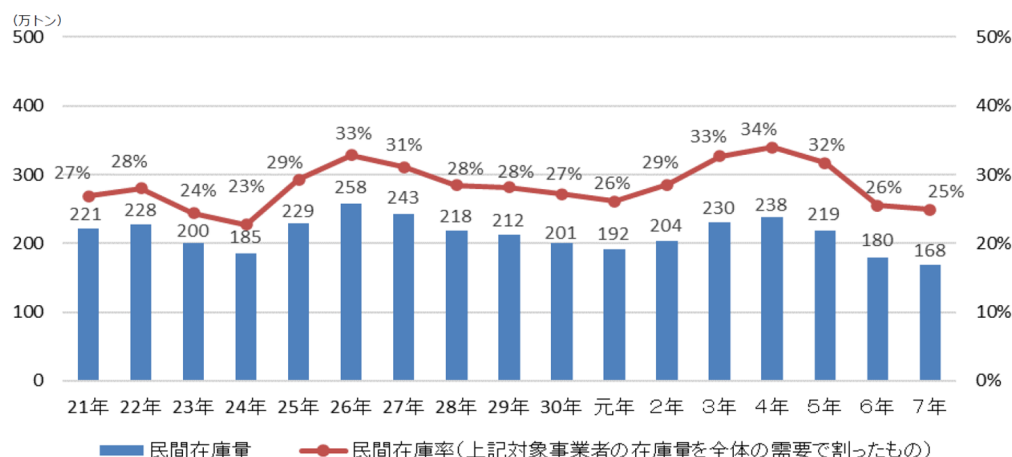
3 販売段階は、米穀の販売の事業を行う者(年間の玄米仕入量が4,000トン以上)である。

4 期間については、6/7年であれば、令和6年7月～7年6月である。

5 令和7年3月以降には、売り渡した政府備蓄米の数量(令和7年4月末時点で16.4万トン)を含む。

年別推移

4月末民間在庫量・在庫率



■ 民間在庫量 ■ 民間在庫率(上記対象事業者の在庫量を全体の需要で割ったもの)

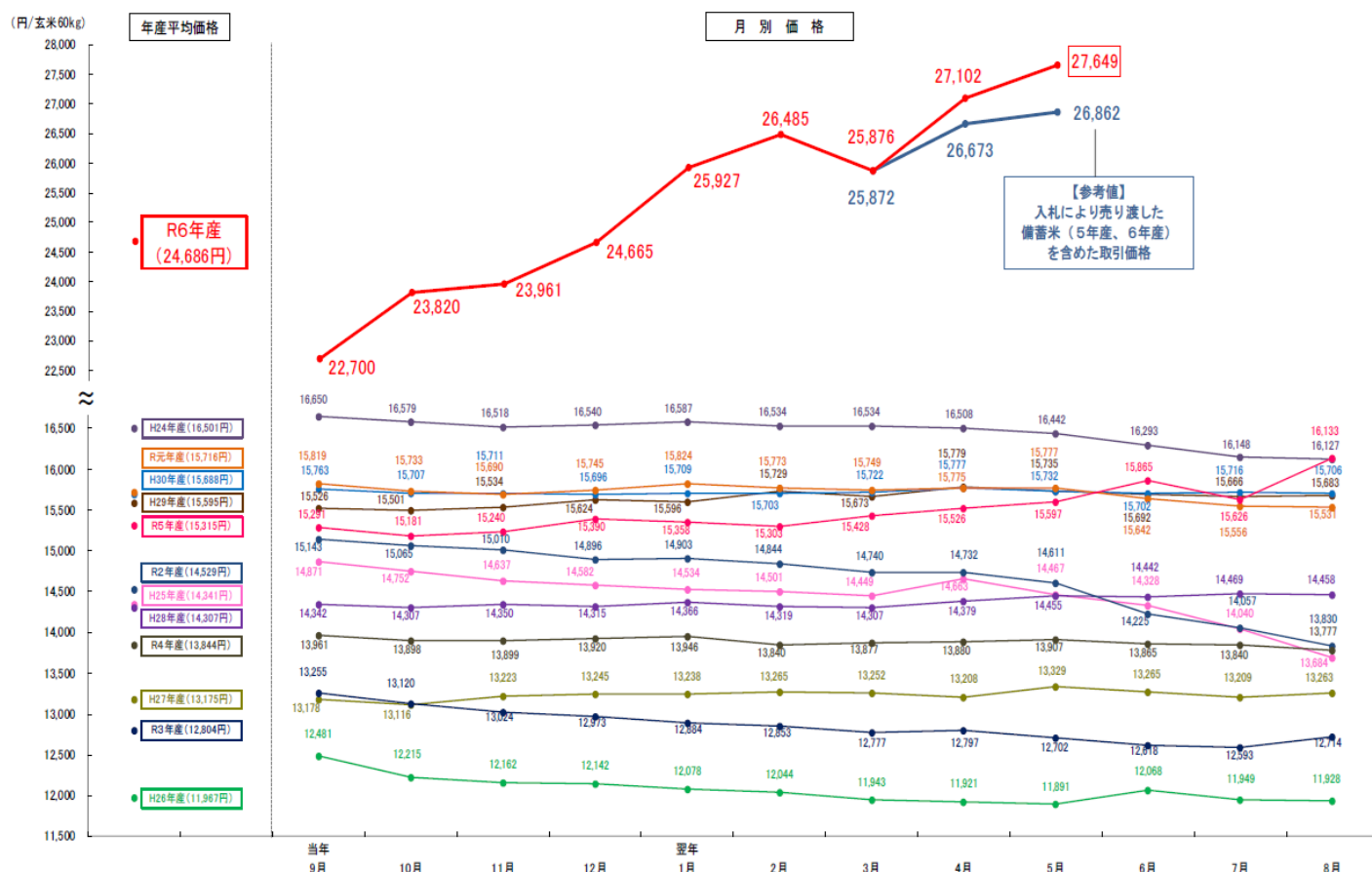
※22年以前は、政府備蓄米の運営を回転備蓄方式で実施していたため、政府備蓄米がこの他に主食用米として販売されている。

※令和7年は、売り渡した政府備蓄米の数量(16.4万トン)を含む。

年産別の相対取引価格（速報）

- 令和6年産米の令和7年5月の相対取引価格は、備蓄米の取引を含む全銘柄平均で27,649円/60kgとなり、対前年同月+12,052円（+77%）、対前月+547円（+2%）。取扱数量は、5.2万トンとなったところ。
- 令和6年産米は、例年より早いペースで取引（契約）が進み、令和7年5月で取引（契約）は終盤となっていることから、5月の取引価格の上昇が令和6年産米の取引全体に与える影響は小さい。
- なお、令和7年3月以降の米の取引価格の参考として、令和5年産の備蓄米も含めると、26,862円/60kg。
- 令和7年5月までの年産平均価格24,686円/60kgは、出荷業者と卸売業者等の間の取引価格としては、比較可能な平成2年以降で過去最高の価格である。

相対取引価格の推移（税込）（全銘柄平均価格）



資料：農林水産省「米穀の取引に関する報告」

注1：運賃、包装代、消費税相当額（平成26年3月までは5%、元年9月までは8%、元年10月以降は10%、ただし軽減税率対象は8%）を含む1等米の価格である。

2：グラフ左側の年産平均価格は、当該年産の出回りから翌年10月まで（6年産は出回りから令和7年5月までの速報値）の通年平均価格、右側は月ごとの価格の推移。

3：令和5年産の備蓄米は、政府備蓄米の買戻し条件付売渡しの販売数量等の報告から集計。



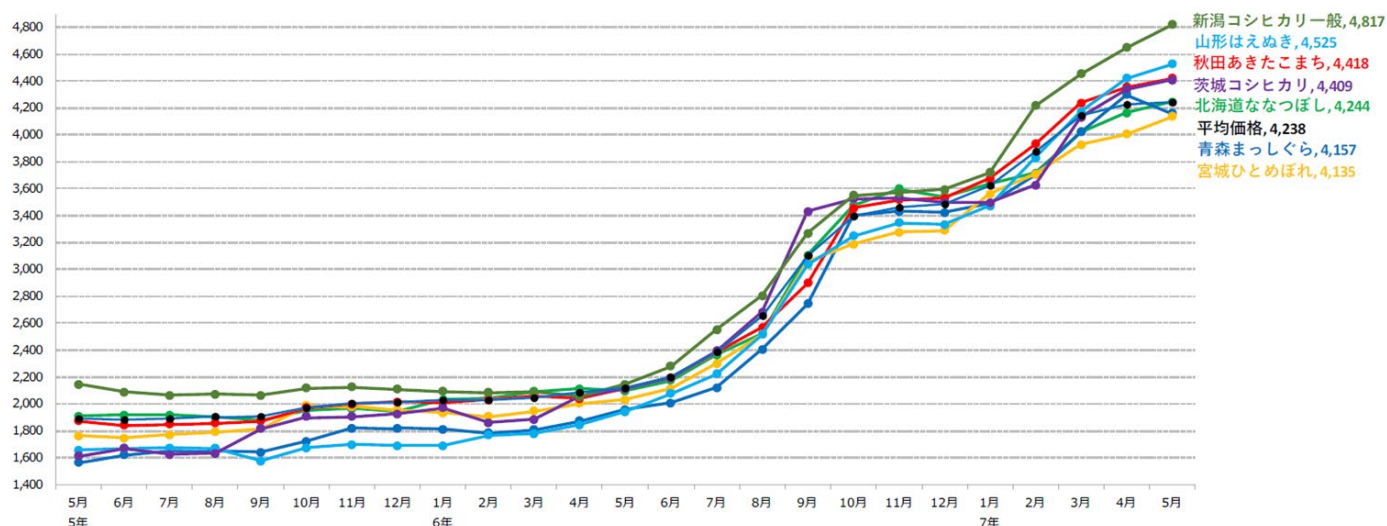
米の価格について

Q.農林水産省が「米に関するマンスリーレポート（以下、マンレポ）」で公表している米の相対取引価格とは、どのようなものですか？

A.米については、全農等の出荷業者と卸売業者等間で、年間を通じて長期的な取引を行う「相対取引」が行われています。このため、農林水産省では、一定規模以上の出荷業者を対象に相対取引価格・数量を毎月調査し、米の取引価格の代表となる指標の一つとして公表しております。

- 令和7年5月の小売価格(POSデータ)の平均価格(5kg当たり)は、対前月差+13円(+0.3%)、対前年同月差+2,116円(+99.7%)の4,238円。

円/5kg袋販売時換算(税込)



資料：(株)KSP-SPが提供するPOSデータに基づいて農林水産省が作成

注1：(株)KSP-SPが提供するPOSデータは、全国約1,000店舗のスーパー、生協等から購入したデータに基づくものである。

注2：POSデータは、データ提供企業から遅れて報告されるものもあるため、時点によって集計結果に若干のずれが生じることがあり、今後、修正されることもある。

注3：POSデータの提供店舗数は、変動があることに留意が必要である。

注4：全POS取引平均価格は、POSデータで把握できる全ての精米の販売について5kg袋販売時に換算した上で加重平均を行った価格である。

注5：価格に含む消費税は8%である。

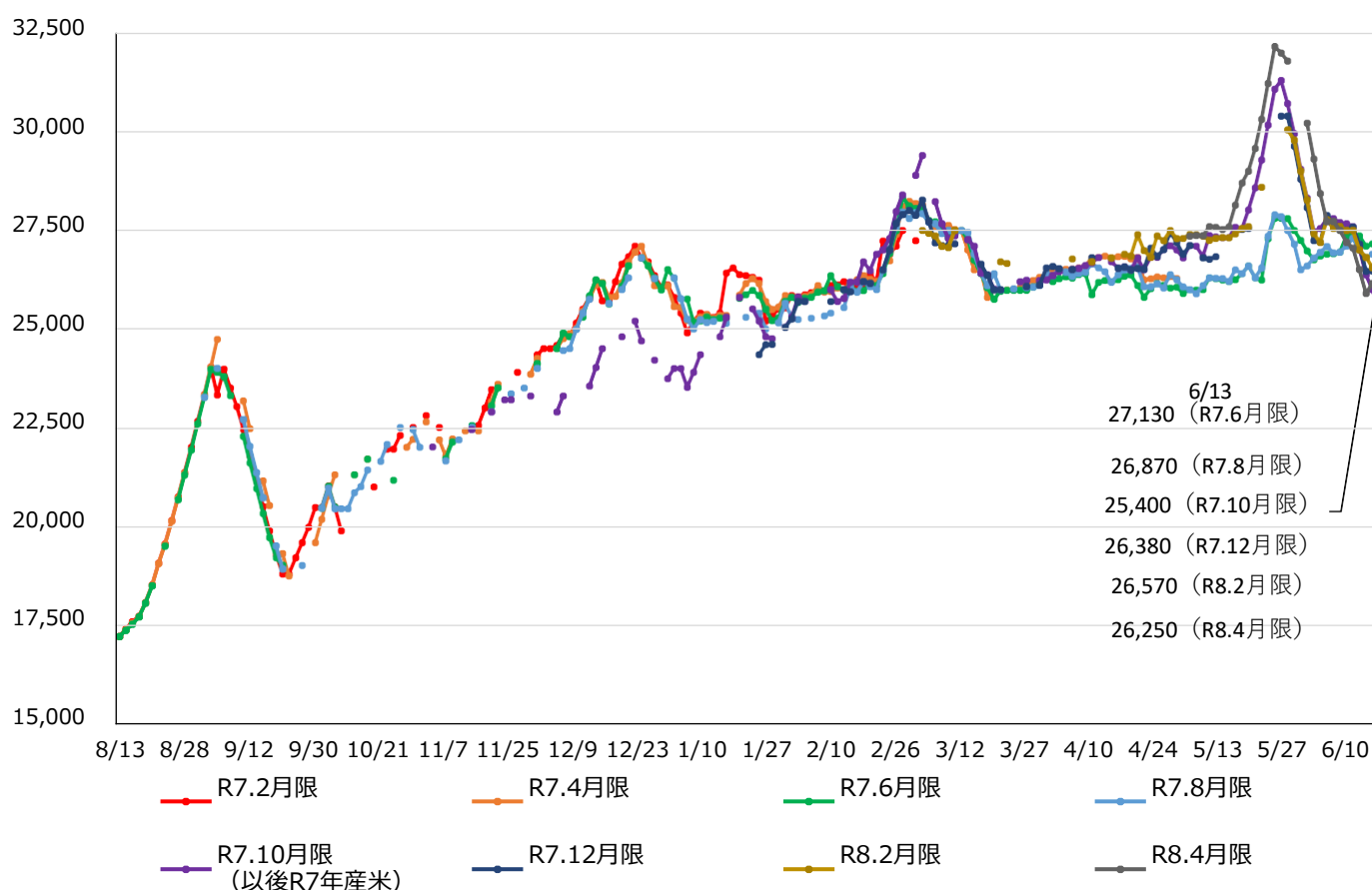
堂島取引所による米穀指数市場（先物取引）の状況

米穀指数（堂島コメ平均）の最新の取引関係データは、堂島取引所HPから御覧いただけます。

【 <https://www.odex.co.jp/data/market-information/market-kome-shisu/index.html> 】

米穀指数（堂島コメ平均）の推移

（単位：円/60kg）



出典：株式会社堂島取引所

注：R7年8月限はR6年9月2日に新甫発会、

R7年10月限（10月限よりR7年産）はR6年11月1日に新甫発会（R6年11月1日は取引不成立）。

R7年12月限はR7年1月6日に新甫発会（R7年1月6日は取引不成立）。

R8年2月限は3月3日に新甫発会。

R8年4月限は5月1日に新甫発会。

R7年2月限はR7年2月28日が最終決済日（最終決済数値は27,240（円/60kg））。

R7年4月限はR7年4月30日が最終決済日（最終決済数値は26,330（円/60kg））。